

サンプル版

スケベ短編 01 『艶妄綜管』

作者：金目

## 目次

### 登場人物紹介

#### 柳沢 怜雄の秘密の土曜日(前半)

(サンプル掲載はここまでとなります)

(以下、製品版収録)

#### 柳沢 怜雄の秘密の土曜日(全編)

#### 岸間 勇樹の秘密の翌朝

### 【お願い】

この小説は金目によるフィクションであり、現実存在する個人・団体などとは無関係です。

無断転載・私的利用の範囲を超えた共有などの著作権法に触れる行為、AI・機械学習への利用などは控えていただきますようお願いします。

この作品は犯罪行為を推奨するものではありません。

作中の性行為描写はすべてファンタジーとなります。現実のセックスへの参考になさらないようお願いします。

## 登場人物

### 柳沢 怜雄 (やなぎさわ れお)

29 歳。男性。某大学の空手部コーチ。

レオというよりは熊、と周囲の人に言われるほど大柄でがっしりとした男臭い空手選手。

毎週土曜日、マンションの壁の穴から隣人の部屋を覗いている。

### 岸間 勇樹 (きしま ゆうき)

31 歳。男性。某大学の倫理学の講師。

怜雄の隣人。怜雄とは挨拶と世間話をする程度の仲。

清廉と誠実さを絵にかいたような堅物と周囲に評されている。

## 柳沢怜雄の秘密の土曜日

某大学空手部のコーチである柳沢怜雄は、周囲の人間に「レオというよりは熊」と評される大柄で分厚い筋肉に覆われた男臭い風貌の持ち主である。

今時、無精髭は敬遠されると知っているため、髭は毎朝整えているが、肩から下の体毛は生やしっぱなしにしているため、胸毛も、腹毛も、背中の毛も、腕の毛も、太ももや脛の毛も、なんなら、チン毛やケツ毛も濃い、熊のような風貌の男だ。

とはいえ、野生の熊のような威圧感や暴力性があるわけではない。

笑えば愛嬌があるし、冗談も通じる。

あと、酒が入ってもちょっと陽気になるだけで困った癖もなく、二日酔いになるほど飲むこともないため、飲みニケーションを愛好する人たちに人気がある。

「柳沢さん、今夜、どうですか？」

だから、飲み会の賑やかしが欲しかった新人事務員の富田が怜雄を誘ったのは、富田当人にしてみれば、ごく普通の行為であった。

「ああ、すいません。

今日は都合が悪いんで。

またの機会に誘ってください」

だが、怜雄は富田の誘いに頭を下げた断ってきた。

「あ、ああ、うん、分かったよ」

断られると思わなかった富田は、挙動不審気味に頷く。

だから、富田は堂々とした足取りで去っていく怜雄の背中を呆然と見送ることしかできない。

「あれ？　もしかして富田くん、今日の柳沢さんを誘っちゃった？」

「そうです、三森さん」

近くの棟から出てきた上司である三森に問われた富田は、問いかけに頷く。

「柳沢さん、土曜日は用事があるんだよ。

だから、土曜日だけは、飲み会に誘っても断られるし、スポーツ学部の学部長が誘っても無理。

だから、土曜日は誘うだけ無駄ってのがこの大学の共通認識なんだよ」

「へー、知りませんでした」

三森の説明に、富田は相槌を打つ。

「でも、学部長が誘っても駄目って、どんな用事があるんでしょうね？」

富田の疑問に、三森が曖昧に笑う。

「まあ、それを気にする人は結構いるけど、憶測しかでないねー。

柳沢さん、こっちのプライベートに首は突っ込まないけど、自分のプライベートも話さないでしょ。

その辺の感覚は現代的だから、まあ、柳沢さんが話すまではそっとしておけばいいんじゃないかな」

「あ、そうですね、知りませんでした」

三森の説明を聞き、己の好奇心が下世話であることに気がついた富田は、三森に頭を下げ

て反省の意を示した。

「まあ、当人に問いただしたわけでもなく、憶測を流したわけでもないから、うん。

飲み会の数合わせなら、他の部署の人に声をかけてみるよ」

「ありがとうございます」

富田は三森に頭を下げながら、疑問を抱かずにはいられなかった。

上下関係に厳しい体育会系の怜雄が、目上にあたるスポーツ学部長の誘いを断るほどの用事とは、いったい何なのだろうか？

毎週土曜日の帰宅後に、怜雄は何をしているのだろうか？

怜雄は、住居である中古マンションに向かって早足で歩いている。

熊のような風貌のざんばら髪が、風にわさわさと揺れている。

大学への通勤に使っているバスが途中の事故の影響で大きく遅れたため、いつもより帰宅が大きく遅れてしまったのだ。

急がないと、遅れてしまう！

早く部屋に戻らないといけない理由があるため、怜雄は周囲の通行人にぶつからないように気を配りながらも、早足で住居である中古マンションに向かう。

中古マンションのエントランスに入った怜雄は、エントランスにあるポストの暗証番号を押し、ポストを開くと、中身の確認もせずに雑に鞆の中に突っ込む。

そして、ポストを閉じると早足でエレベーターに向かう。

だが、エレベーターは2機とも、エントランス階から上がっている途中であった。

「仕方がない。階段で行くか」

怜雄の居室があるのは9階だ。

運動能力において平均的な成人男性ならば、階段を上がるよりもエレベーターがエントランス階まで下りてくるのを待った方が、早く9階に到達できるだろう。

しかし、怜雄の身体能力、運動能力は成人男性の平均を大きく上回っている。

それは、オーダーメイドのスーツを着てもなお、熊が人の振りをしているかのような錯覚を与える分厚い筋肉が示している。

怜雄は、エレベーターホールの横にある階段に向かう。

そして、階段を2段跨ぎで登り始めた。

熊のように分厚い筋肉に覆われた怜雄ならば、9階まで駆け上がることもできる。

しかし、階段を駆け上がるということは、居住区であるマンション内に足音を響かせることであり、また、踊り場での衝突時期を引き起こす危険もある。

己の焦りのために、誰かに迷惑をかけることを怜雄は望まない。

社会人としての当然の配慮であると同時に、怜雄には、急いで部屋に戻ることにについて、咎められは困る理由があるのだ。

だから、怜雄は階段を駆け上がるのではなく、2段跨ぎで上がる。

分厚い筋肉に覆われているせいで、短足に見える怜雄だが、実際は足も長い。

だから2段跨ぎも苦にならず、怜雄はどんどん自室に近づいていく。

階段で9階まで上がるのは、怜雄にとってもそれなりに負荷がかかる運動だ。

だから、怜雄の前髪は汗で額に張り付き、ワイシャツも分厚い胸筋に張り付く。  
そして、怜雄はボクサーパンツがケツやチンポに汗で張りついているのを感じた。

とはいえ、汗に濡れた身体と衣服は、怜雄にとって意識することもない問題だ。

平地を歩くような足取りで9階まで上がり終えた怜雄は、呼吸がちょっと早まる以外、疲労の様子もなく、自室の前まで普通の歩幅で歩く。

早足で歩かないのは、各々の部屋の玄関から何らかの事情で住民が飛び出してこないとも限らないからだ。

怜雄には、急いで部屋に戻りたいと同時に、部屋で何をしているのかを詮索されたくない理由がある。

故に、急がば回れの精神で、怜雄は普段通りの速度で歩き、自室の前まで辿り着く。

鍵を二つ開けた怜雄は、そのまま部屋に入る。

そして、鍵を掛け、チェーンも締めると、持っていた鞆を靴箱の上に放り投げた。

靴べらも使わずに靴を脱いだため、革靴の踵がちょっとひしゃげてしまう。

けれど、怜雄は革靴の歪みも気にせず、玄関から部屋に入る。

そして、ネクタイを緩めながら物置にしている部屋に向かう。

物置にしている部屋の照明をつけた怜雄は、汗で額に張りついた前髪を左手でかきあげる。

髪の毛だけではなく、ワイシャツやスラックスも汗で張りついていてベタベタしているというのに、怜雄はその場でジャケットとワイシャツを脱ぎ、床に放る。

そして、物置部屋の鍵を内側から掛けると、スラックスのベルトを緩め、スラックスとボクサーパンツを一緒に踵まで引きおろし、踵を順番に抜いた。

全裸となった怜雄は、熊というよりはマタギのような風貌であった。

髪の毛や腕や脛の毛が濃いため、怜雄は、服を着ていると熊のような雰囲気を漂わせる。

だが、逆に服を脱ぐと、熊と呼ぶには体毛が薄いと分かり、熊のような雰囲気からマタギのような雰囲気に代わるのだ。

体毛は、成人男性としてはとても濃い方だ。

だが、人間にしては濃い体毛でも、獣の剛毛に比べれば薄いというだけのことだ。

スラックスとボクサーパンツを脱ぎ捨てた怜雄は、踵でスラックスたちを蹴り飛ばす。

スラックスなどを蹴り飛ばした動きで、怜雄の股間の半剥け逸物がブルルボルンと大きく震える。

今はフリーであるが、女性経験をそれなりに重ねてきた怜雄の亀頭は男と女の寝技について熟練しているため、黒々としている。

怜雄の逸物は大柄な体躯との比較、そして、濃いチン毛、玉袋の毛、太ももの毛のせいで埋没気味に見えるため、短小に見える。

だが、怜雄が大きな掌で玉袋を揉んでみると、怜雄の大きな掌に収まりきらないほどのボリュームがあることが分かる。

全裸に靴下だけの姿となった怜雄の半剥け逸物には、ボクサーパンツを脱いだ拍子に絡んだのか、チン毛がちょっと挟まっている。

皮が被った亀頭の持ち主ならば実感できるだろうが、包皮と亀頭の間にチン毛を巻き込んでしまうと、違和感がある。

毛の1本分の細さであっても、亀頭と包皮の間に挟まると気になる男は多いのだ。

怜雄もまた、亀頭と包皮の間にチン毛が絡むと気になる方だ。

ただ、今の怜雄にはチン毛を取り除くことより大事なことがある。

だから、怜雄は物置部屋の隅に置いている、帽子の棚の前に早足で向かう。

物置部屋なので、フローリングのままなのだが、帽子の棚の前だけは体操用のマットが敷かれている。

怜雄は、そのマットの上に上がると四つん這いになる。

怜雄のケツもケツ毛が濃い。

ケツの割れ目の間だけではなく、雄肉がぎゅっと詰まった分厚いケツ肉にもまばらに毛が生えているし、会陰部にも濃い毛が生えている。

四つん這いになった怜雄の分厚いケツと逞しい太もの間では、玉袋の毛も濃い怜雄の逸物がブルンブルンと揺れている。

怜雄は、四つん這いになったまま、帽子の棚の一番下に置いてある帽子箱を手前に引き出し、蓋を開ける。

蓋の中には、帽子ではなく、コンドームとウェットティッシュ、消臭スプレーが入っている。

怜雄は、コンドームを一包取り出すと、半剥け逸物を何回か抜く。

平常時でさえ大きな逸物が、怜雄の手によってぐんぐんと勃起していく。

怜雄の手の中で、半剥け逸物が完全に勃起をした。

フル勃起に伴い、半剥けの包皮が雁首の下にまで後退し、絡んでいたチン毛が雁首のあたりにくっついただけの状態になる。

怜雄は、そのチン毛を指先で軽く払い落とすと、コンドームの包装を開け、慣れた手つきでコンドームを装着する。

コンドームを装着した怜雄のフル勃起逸物は、極薄のコンドームのせいで卑猥さと雄々しさがせめぎ合ういやらしい肉棒と化した。

怜雄が過去に交際をした女性たちも、怜雄の勃起逸物、男と女の寝技については絶賛し、善がり狂ったものだ。

怜雄は、コンドームの包装を帽子箱に入れると、帽子箱を体操用マットの隣に寄せる。

そして怜雄は、帽子箱をどかし、空っぽになった帽子棚の一番下の背板に手を伸ばした。

帽子棚の背板には、怜雄が加工した小さな穴が開いている。

怜雄は、その穴に毛が生えた指を伸ばし、引っかけると、そのまま右にスライドさせた。

そう、帽子棚の一番下だけは、背板としてカモフラージュをした引き戸なのだ。

引き戸の奥には、小さな覗き穴が開いている。

ただ、壁を傷つけただけの穴ではない。

覗きがしやすいようにレンズと筒で加工をされた、本式の覗き穴だ。

怜雄は、具体的な構造や仕組みは知らないが、角度を変えながら覗くと覗き穴の先の部屋のかかなり広い範囲を覗けるだけではなく、覗き先の物音も拾える、いやらしい覗き穴なのだ。

怜雄は、そのまま棚に頭を突っ込み、ケツを突き出すよう姿勢で覗き穴を注視する。

その姿勢は、どんなに弁護や詭弁を重ねようとも、まぎれもなく、変態で、覗き魔だ。

分厚いケツ肉とがっしりとした太もの間で、だらんと垂れた玉袋が文句なしの逸物で

あろうとも、変態覗き魔であることは間違いない。

怜雄自身、そのことは強く自覚している。

だから、絶対に揉め事を起こさないように、普段から礼儀正しく過ごし、覗きをする土曜日の夜も、急いでいても焦らないように己を律しているのだ。

「ああ……よかった。

今日はまだ、始めたばかりだな」

怜雄は覗き穴に顔をくっつけながら安堵の息を吐く。

全身を濡らす汗や、汗に濡れた状態で脱ぎ捨てたスーツ一式のことも気にせず、怜雄は覗きに集中する。

この穴は、怜雄が空けた穴ではない。

前の住民が去ったあと、怜雄が入居した際には既に空いていたのだ。

道義的に判断をするのならば、怜雄はこの覗き穴について、マンションの管理組合に報告をするべきであった。

だが、この覗き穴の先に住む隣人が、同じ大学に勤務する倫理学の講師である岸間勇樹だと知っていた怜雄は、何となく、穴がどんな風に見えるのか興味を持ってしまった。

勇樹の日常に興味があったのではない。

勇樹は男なので、覗かれて困るようなことないだろう、という時代遅れの楽観と、覗き穴という未知の細工への興味に動かされただけだ。

そして、覗き穴に顔を近づけた怜雄は、隣室の音が耳に届くことに気がついた。

どんな機構によるものなのか、この覗き穴は隣室の物音も耳に届けさせるのだ、と知ったのだ。

予想以上の技巧によって開けられた覗き穴に驚き、硬直した。

この時、即座に覗き穴から離れれば、怜雄は道を踏み外すことはなかっただろう。

だが、驚き、硬直した怜雄は、隣室の住民である勇樹を見てしまった。

勇樹の浅ましい姿に目を奪われてしまったのだ。

毎週1回、土曜日の夜にだけ行方、勇樹のいやらしい行為を見てしまった怜雄は、こうして、毎週、覗くようになったのだ。

怜雄が覗いていることも知らずに、勇樹が今日もいやらしいことをしている。

怜雄の呼吸に淫靡な熱が混じる。

怜雄は右手で己の勃起逸物を握りながら、覗き穴に集中し始めた。

怜雄に覗かれているとも知らずに、勇樹が床にディルドを並べている。

それも、全裸でだ。

倫理学の講師をしている勇樹だが、講師という職業から連想されるような痩せ気味で、不健康そうな体格ではない。

勇樹は、平均的な成人男性よりは筋肉のメリハリがある。

ジムに通っているわけではなく、義務教育期間中に習った筋力トレーニングを愚直に続けた結果、今でもメリハリのある筋肉を維持していると、マンションのごみ集積場での世間

話において、怜雄は勇樹から聞いた。

勇樹は、目立つ風貌はしていない。

近視が酷いため、眼鏡の奥で細めた目は厭世的だという誤解を与えるが、ただ単に目つきが悪いだけであり、別に人間嫌いではない。

笑いもせず、よほどのことがない限り、怒鳴りもしないが、質問には真摯に回答をし、評点は辛い代わりに、減点理由をきっちりと答案に記載する。

人間を、学生を嫌っているのなら、そこまできちんと向き合わないだろう。

だから、勇樹の講義を受けた人間は、評価が良かろうが悪かろうが、「岸間先生は、すごく真面目だから依怙最良は絶対にない」と認める。

マンションでも、「岸間先生は誠実だから」と評判が良い。

そう、アスリートとして、柔道部のコーチとしての外面で生きている怜雄と違い、勇樹は骨の髄から四角四面の真面目なのだ。

だから、そんな勇樹が、部屋で全裸になり、床にディルドを置いている姿は、世間や大学での評価とは真逆だ。

そう、柔道部のコーチとして、男らしいと思われている怜雄が、卑劣な行為である覗きを全裸で行っているのと、同様に、勇樹は、世間や大学での評判に反する行為をしているのだ。

勇樹が床に置いているディルドは、正確なサイズは分からないが、勃起時の勇樹のチンポより大きい。

ディルドは、勇樹や怜雄と同じ人種のチンポに近い色をしているが、亀頭は真っ黒だ。

夜の寝技の戦果の証である黒ずみではなく、マジックで塗ったかのような真っ黒なのだ。

そして、雁首だけは紫色をしている。

このディルドは、勇樹のお気に入りである。

毎週土曜日の勇樹の痴態を覗き続けてきた怜雄は、その様子を何度も何度も目撃したのだ。

「ああ……ケツが疼く……

益荒男のテストステロンの熱を全身で浴びたい……

兄様のテストステロンの熱が欲しいです……」

覗かれていることも知らずに、勇樹がいやらしい願いを口にする。

毎週土曜日に、勇樹の痴態を覗き続けてきた怜雄は、勇樹の「兄様」が床に置かれたディルドであることを知っている。

怜雄に覗かれているとも知らずに、勇樹がローションを手に取り、全身に塗り始める。

ローションを全身に塗りこめる勇樹の姿は、男だというのに、これまで怜雄が交際をし、抱いてきたどんな女よりも、蠱惑的であった。

全身をローションで滑らせた勇樹の裸体は、愚直な筋力トレーニングでメリハリをつけた筋肉を、いやらしく光らせている。

勇樹の裸体には体毛がない。

脱毛をしたのか、元々薄いのか、怜雄には分からない。

この覗き以外では、怜雄は勇樹の裸体を見たことがないため、勇樹にそんなことを問える切っ掛けがないのだ。

勇樹の股間も無毛である。



無毛の下腹部の先には、怜雄よりは小さそうなものの、その代わり、ずる剥けで雁首が高い男らしいチンポがぶら下がっている。

「ああ……ケツが疼く……

兄様……お許してください……

俺は……益荒男でヌクために……スポーツが強い大学を……選びました……」

勇樹は、口では己の性欲を懺悔しながらも、床に置いたディルドである「兄様」にローションを塗りながら、うっとりとした顔で囁いている。

勇樹がうっとりとして撫でまわしているディルドは、怜雄にとっても見慣れたものだ。

怜雄が初めて覗いたとき、勇樹はそのディルドをケツに挿入し、「兄様！」と喘ぎながら抜き差しをしていた。

怜雄が、次の土曜日に覗いたときも、勇樹はそのディルドを「兄様」と呼びながら何度も何度もキスをし、丁寧にローションで愛撫し、ケツに導き入れていた。

ディルドを「兄様」と呼び、慕い、兄様をケツに導き入れる勇樹の痴態を、怜雄は忘れることはできなかった。

普段の勇樹は、四角四面で生真面目な倫理学の講師としての姿が揺るぐことはない。

笑いもせず、怒鳴りもしない男の中に、いやらしい性欲が煮えたぎっているなどとは、大学での外面だけでは、マンションの隣人としての様子では、見抜くことなどできるわけがない。

事実、何度も何度も、勇樹の痴態を覗き見ている怜雄でさえ、部屋の外の勇樹から、性欲の痕跡を見出すことはできない。

勇樹は、アスリートへの欲情を口にしながらも、食い入るように大学のアスリートを見つめたりはしない。

普段、四角四面の生真面目だからこそ、誰かを食い入るように見ていれば、噂にならないわけがない。

だが、怜雄の耳にそんな噂が届いたことはない。

つまり、普段の勇樹は、アスリートへの劣情を決して表に出していないのだ。

怜雄が、覗き魔としての本性を隠し通しているように。

バレたら軽蔑される秘密を抱える者同士として、怜雄は一方的に勇樹に親近感を抱いている。

そして、勇樹の痴態を間近で見守らなければならない、という歪んだ責任感を抱いている。

「ああ……兄様……

今日は……兄様の御慈悲は駄目だというのですね……」

勇樹が、切なそうに呟きながら、いつもケツに迎え入れているディルドの「兄様」を床に置いた。

「ああ……兄様……兄様……

俺が……他の男に見惚れたことを……お怒りなのですね……

お許してください……お許してください……」

勇樹が、ディルドの「兄様」の前で土下座をし、何度も何度も詫びている。

「おお……」

初めての展開に、怜雄は思わず声を上げた。

怜雄の股間では勃起した逸物が痛みを伴うほどに海綿体を膨張させている。

怜雄が知る限り勇樹は、いつもいつも、「兄様」と呼び慕うディルドでオナニーをし、絶頂していた。

その様子を見つめながら、怜雄もまた、オナニーをしていた。

毎週土曜日のオナニーの快楽を際立たせるために、怜雄は、日曜日から金曜日まで禁欲までしている。

それほどまでに、怜雄は、勇樹のオナニーを覗くことを愉しんでいる。

その勇樹は今日、兄様と呼び慕うディルドを床に置き、謝罪をしている。

どんな展開になるのか、怜雄には分からない。

どうなるのか、何が起こるのか、怜雄は期待で頭がおかしくなりそうだ。

「はあ……はあ……」

怜雄は、覗き穴が開いた壁が湿気ってしまいそうなほど、ねっとりとした劣情の息を吐き続けている。

棚の外で突き出されている分厚いケツ肉の下では、怜雄の性的興奮に合わせて、フル勃起逸物がバルンバルンと震え、その勢いに合わせて玉袋も揺れている。

「どうなるんだ……どうするんだ……」

怜雄は、これまでと違う展開に興奮し、壁に向かって囁き続けた。

## 奥付

### サンプル版 スケベ短編 01『艶妄綜管』

初出：2025 年 04 月 29 日

作者：金目

#### 金目の同人活動一覧

【pixiv】

<https://www.pixiv.net/member.php?id=22137005>

【DLsite がるまに】

[https://www.dlsite.com/bl/circle/profile/=maker\\_id/RG01002299.html](https://www.dlsite.com/bl/circle/profile/=maker_id/RG01002299.html)

【ゲイ小説進捗状況呟きアカウント】

[https://twitter.com/chigaya\\_deep](https://twitter.com/chigaya_deep)